

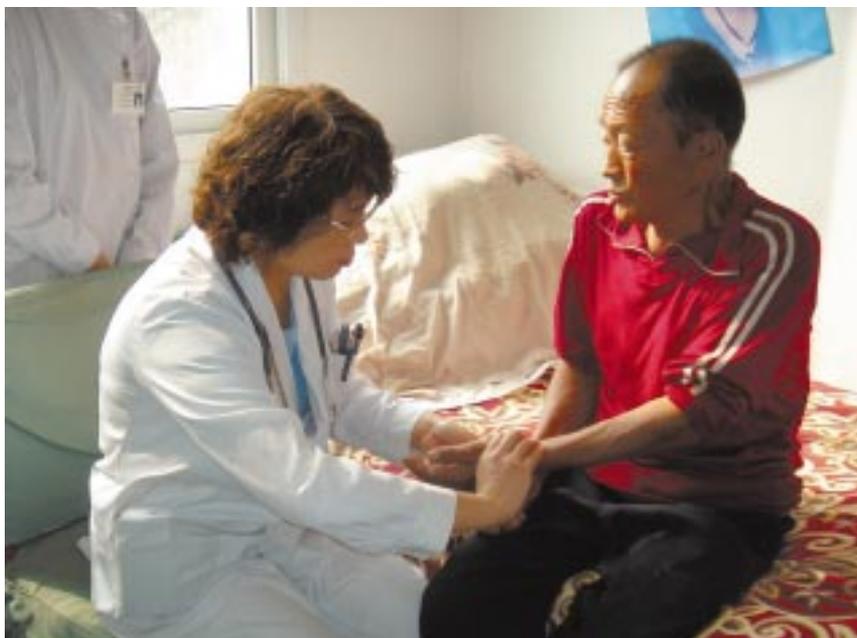
[中国]

貧しい農村で 医療相談ボランティア

都市と農村の格差が懸念される中国の貧しい農家の
人々を助けようと、「JICA医療分野帰国研修員同窓会」の
医師たちが無料で診療活動を行った。

Close Up!

ジャイカの
あしあと



「ありがたい。ぜひまた診にきてほしい」。麦畑と果樹園地帯に暮らす人々の言葉は、医師たちの心に深く残った。

2006年10月14日、北京にある日中友好病院の医師を中心とするJICA医療分野帰国研修員同窓会のメンバー11人と看護師、JICA中国事務所スタッフは、バスで1時間半ほどかけて、郊外の順義区木林村衛生院に向かった。農村に暮らす人々の無料診療活動を行うためだ。

08年に夏季五輪が開かれる北京では、急速に整備された道路沿いに、高所得者層向けの住宅や競技施設が次々と建設されている。だが、華やかな発展の影には、重病を患いながらも貧困のため病院に行くことができない人々もいる。こうした人々のために「医療に携わる者として少しでも役に立ちたい」と立ち上がったのが、医療関係者約240人で構成される同窓会の医師たちだ。同窓会は、06年8月に設立されたばかりで、今回の無料診療は彼らにとって初めてのボランティア活動。当日は早朝から院内を埋め尽くさんばかり

の村人が詰め掛けた。それほど待ち望んだ貴重な機会だったのだ。

午前9時、順義区衛生庁幹部や衛生院院長などの出迎えを受け、受付や診療科の役割分担振り分けなど、衛生院と同窓会の手際良い連携でスムーズに医療相談が行われた。また、同窓会長で日中友好病院副院長の劉曉勤さんらが、貧困農家数軒を訪問。特に症状の重い患者に対し診察を行い6カ月分の薬を手渡した。貧困農家には、高血圧や糖尿病、ぜんそくなど慢性的な病気のために農作業ができず、廃品回収をしながら生計を立てている高齢者もあり、「薬のおかげで何とか冬を越すことができる」と感謝の言葉を繰り返していた。この日、診療を受けた患者は300人以上。国内で大きく報道された。医師たちは「北京近郊にすら医療を受けられない人々が存在する。医療・社会保障分野での支援の重要性を再認識した」と語り、今後もちこうした活動を実施する予定だ。

